

タイトル	送別の辞(退職記念)
著者	追塩, 千尋
引用	北海学園大学人文論集, 45: 1-2
発行日	2010-03-31

# 送別の辞

人文学部長 追 塩 千 尋

2010年3月31日をもって、英米文化学科栗原豪彦、大塚秀之両教授が停年でご退任されることになりました。両教授ご退職にあたり、一言送別の辞を述べさせていただきます。

栗原教授は36年間に及ぶ北海道大学文学部及び言語文化部の教官を経て、2003年に本学に着任されました。その年に懸案でありました英米文化学科に大学院修士課程が設置され、栗原教授はその要の教員の一人でした。その後博士課程も順調に設置され(2005年度)、大学院教育を中心として本学部の重要な役割を担っていただきました。ご専門は語用論・社会言語学の視点からの英語学・言語学ですが、近年は言語理論の基盤概念の見直し作業を自己の課題とし、学部生・院生には日常の言葉の背後の仕組みを既存の理論に縛られずに整理・解説し得る能力を培う指導をされていました。

学部の委員では、英語教育委員会発足時からご退職の年まで委員長としてその委員会の運用を軌道に乗せたことが特筆されます。人文学部には7人のEFL教員がおりますが、それらの教員とのコミュニケーションが必ずしも十分ではなく、授業の編成などに苦労を重ねていました。英語教育委員会はそうした課題解消のために設置されたものですが、栗原教授はその英語力を存分に発揮され外国人教員とのコミュニケーションをはかり、英語の授業編成を円滑に行ってきました。それは単に英語力ばかりではなく、温厚で懐の深いお人柄によるものであるところが大きかったといえます。

大塚教授は38年間にわたる神戸市外国語大学の教員を経て、2005年に本学に着任されました。その年に英米文化学科の博士課程が設置されましたが、その要員として既に着任されていた安岳教授と共に外国史の指導に

当たられました。ご専門は米国現代史で、米国における二つの主要な社会関係（人種関係・階級関係）に即して現代史を分析し、特に人種関係の持つ重要性を鮮明化する、というものです。また、経済史にも造詣が深いということで、本来のご専門からは少々外れる現代経済論という科目をご無理を願って担当していただきました。

私は図書館を比較的利用する方ですが、時間帯や時期の違いなどもあるのですが、そこで他の教員と出会うことは意外と少ない、という感じをもっています。しかし、ご本人は気づいておられないかも知れませんが、図書館で一番多くお見かけしたのが大塚先生で、カウンターの横で英字新聞と思われる資料をせっせとコピーする姿でありました。印刷室でもよくお見かけしたので、おそらくそれは教材用のものであったと推察されます。学生（院生）指導の熱心さを垣間見た思いでした。

教授会でも筋の通った発言で、それまでどちらかといえば曖昧に進めていた点を糺す、ということが一度や二度ではありませんでした。また、全学委員（広報・公開講座委員会など）においても委員会では人文学部が不利益を被らないように対応されていたことが、その報告からもしばしば感ぜられました。

栗原教授は7年、大塚教授は5年、と本学の在職期間は長いものではありませんが、本学部に残された足跡は大きなものがあります。学識・教育経験ともに豊かな両教授が本学を去られることは誠に残念で痛手ではありますが、お二人のご健勝と今後のますますのご活躍をお祈りし、送別の辞に代えさせていただきます。